

大いなる変身

黒岩重吾

サンケイ新聞社

大いなる変身

黒岩重吾

サンケイ新聞社

大いなる変身

黒岩重吾

昭和47年9月29日 1刷
昭和47年12月12日 5刷

定価六八〇円

発行者 小野田 政

編集者 塩田 廣 八

印刷 堀内印刷株式会社

製本 田中製本印刷株式会社

発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・千代田区神田錦町三の

一五梅屋ビル(101)

大阪・北区梅田町二七(530)

乱丁・落丁本はおとりかえします

目 次

胃	痛	5
電 車 の 中 で		10
見 知 ら ぬ 女		15
神 経 症		21
日 曜 日 の 孤 独		27
三 人 の 女		32
重 役 の 忠 告		38
自 由 な 世 界		43
勝 手 な 約 束		48
四 日 に 一 度		54
パチンコの女		59
新 しい 約 束		65
支 店 長 の 悪 口		70
危 機 一 髪		76
現 代 娘		81
娘 の 行 動		87
映 画 の 観 客		92
役 得		97
釣 っ た 魚		103
会 議 の 内 容		108
某 重 役		114
女 の 部 屋		119
佗 しい 女 達		124
上 司 の 顔		130
女 の 頼 み		136
重 役 の 腹		141
常 務 の 腹		147
自 由 な 女		152
ベ ッ ド の 女		158
秘 密 情 報		163

夜の使い	169
野の百合	174
嗅覚の問題	180
密談	185
怖い名案	191
大きなチャンス	196
他人の家庭	201
孤独の夜	207
御破算	212
遅れた電車	218
男の自信	224
プロとのデート	229
ライバル	235
予期しない気持ち	240
監視	245
思わぬ女	251
愛社精神	256
女性論	262
兄と妹	267
電車の中で	272
安心と油断	277
怖い媚態	283
株屋の重役	288
一点を見る	294
夜の船	299
凍った花	304
複雑な関係	309
BGのような女	314
夜のドライブ	319
石投げ	325
陰険な男	330
試写室で	336
遅くない儲け	341

大 い な る 変 身

『大いなる変身』は「週刊サンケイ」昭和46年7月5日号と47年9月15日号に連載されたものです——編集部

胃 痛

貝谷浩一が杉谷電機の第一販売部長に栄転したのは、四月だった。第一販売部はテレビ部門を主体にしている。ところが販売部長になって以来、どうも貝谷は気分的にすくれないのだった。第一販売部長といえは、出世街道では最右翼だった。次は取締役営業部長で、まさに重役コースである。

普通なら仕事に張り切って充実した毎日を過している筈だった。貝谷は四十八歳である。社内の部長としては、最も若い。

貝谷が自分がおかしいな、と思ったのは、貝谷の栄転を祝う歓迎会が行われた翌日だった。その夜、貝谷は酔い、大阪のキタ新地のバーを四軒ばかりはしごして自宅に戻った。自宅は甲陽園の近くにあった。

山を切り開き、造成された土地に、近代建築のスマートな家が数十軒建っている。

貝谷の家もそこにあった。敷地は百坪、建坪は二階も合せて四十五坪の鉄筋だった。

庭は芝生で白い金網で蔽われている。D住宅が建築したもので、この造成地の家は総てそうだった。この家は二年前に建てた。当時は、坪七万円だったが、今はもう十万になっているらしい。

会社から金を借り、彼は貯金を下ろし、住宅ローンで建てたのだった。貝谷の細君の尚子は、こういう家に住むのが唯一の望みだった。だから貝谷は、尚子の望みを遂に達してやったわけだ。

貝谷がおかしいと思ったのは、その翌日胃が痛み食欲がなく、何となく癌ではないか、と疑い出したことが始まりだった。

胃に膨脹感があつて、それが夕方になっても取れないのだ。始めは飲み過ぎのせいかもしれない、と家庭薬を飲んだが、夜の食事さえさっぱりおいしくない。食事の後、週刊誌を開くと癌の特集記事があつた。読んでみると自分の症状にぴったりのような気がする。

半年程前から、時々胃が痛んだり、食欲がない時があつた。風呂で身体を眺めると、痩せてはいないが、肌は今までのような艶がないようであつた。

気にはしていたが、仕事がいそがしく、医者に診て貰う暇がなかった。貝谷は、その夜、明日は会社の医者に診て貰おうと思った。

貝谷が勤めている杉谷電機は、資本金三百五十億である。家電メーカーとしては有名である。会社には立派な診療所がある。

貝谷の家族は細君の尚子と、長男の浩太郎と、娘の江利加であつた。浩太郎は今年、京都の大学に入った。国立大学である。娘の江利加はM女子学院の高等部の一年生だった。

つまり、細君と一男一女で、理想的な家庭だった。尚子

は四十二歳だった。

貝谷がリビングルームでテレビを見ていると尚子がやって来た。

「ね、添島さんに、何をお送りしたら良いかしら、値段は一万円前後で良いでしょう」

貝谷が見ているテレビは、外国のサスペンスドラマだった。貝谷は、そんな話は、後にしてくれ、といった。

「あなた、あなたが第一販売部長になったのは、矢張り添島さんの御推薦があったからでしょう、これは大事なお話なのよ」

添島は常務だった。尚子は添島の細君の敬子とは、女学校の三年後輩だった。それを知ったのは、貝谷が課長になった頃である。

それ以来尚子は、敬子に取り入り、敬子が加入しているゴルフクラブに入って、一緒にゴルフに行ったりしている。

「うるさいな、今、僕はテレビを見ているんだ、そんな話は、後にしてくれ」

貝谷はテレビを見詰めながらいった。

貝谷が尚子にこんな態度を取ることは珍しい。貝谷は結婚して以来、尚子を怒鳴ったのは、数える位しかなかった。

尚子も吃驚したらしい。だが尚子には、夫のためを思っ

て話しかけたという意識がある。

「あなた、テレビとお仕事と、どっちが大事なの、私の話は、あなたのお仕事に関係があるんじゃないの」

テレビに熱中していた貝谷の気分はすっかり壞れてしまった。貝谷は尚子を見た。

尚子は、ここ数年太り、今は十六貫近くになっている。

顔も大きく、眼鼻だちがはっきりしていて、昔はかなりの美貌だったが、今は間のびがしたような顔であった。

尚子は、貝谷と向い合ったソファに坐っている。貝谷はまじまじと尚子を見詰めた。

これが俺の女房なのか、と貝谷は思った。二十年来、見慣れた顔であった。

ところが不思議なことに、その時、貝谷には、尚子の顔が見知らぬ他人のように思えたのだ。昔はセクシーだったが、今はただ、大きくて醜いというだけの唇が、ばくばく動いている。その声がテレビドラマのせりふと一緒になり、貝谷には、わけの分らないことを喋っているような気がするのだった。

「君は、僕の、大事な休息の時間を邪魔する積りだね、僕の健康がどうなっても良いのか」

「何をいつてるの、今日はどうかしているわね、昨夜余り飲み過ぎたんで二日酔いじゃないの」

「二日酔いだって、冗談じゃない、僕は癌かもしれない、いや、多分、癌だろう」

これには、尚子も本当に驚いたようだった。狼狽したように、貝谷の症状を尋ねた。

貝谷は、サイドテーブルの週刊誌の記事を尚子に渡した。この通りなんだ、と貝谷はいった。尚子は、記事を持ちと見たが、読もうとしない。

「そんなに心配なら、明日にでも、お医者さんに診て貰うたらどうなの、会社の先生より、伊丹先生の方が良いわ」

伊丹というのは、伊丹診療所の所長で、尚子は添島の細君に紹介され、一寸風邪でもひくと、電話を掛けたりしている。都心のビルの一室を診療所にし、ハイクラスの客を擱んでいる。だから、健康保険などで診て貰う患者はいないのだ。

「僕は、会社の医者の方が良い、伊丹さんなんかには絶対診て貰わないぞ」

「あなたが嫌なら無理にとはいわないわ、じゃ、添島さんにお送りするもの、私が勝手に選びますからね」

「ああ、君にまかすよ」

そうはいったものの、貝谷は、少し妙な気がした。第一販売部長になったのは、確かに添島の力が大きいかもしれない。だが、榮転だから、こちらは祝いの品を貰う方で、渡す立場ではないのではないか、とふと思ったのだ。

現に部下から、かなり祝いの品が来ている。尚子は、それを克明にノートにつけていた。

そんな品を、送ったりしたら、添島はかえっておかしく思うのではないか。

「添島常務に送っちゃいかん、もしどうしても送りたいければ、奥さんの方にお渡しするんだ、分ったかね」

「それ位は、分っています」

尚子が良い掛けだったので、貝谷は、一人にしておいてくれ、といった。

「今は誰とも会いたくないんだ」

この貝谷の言葉は尚子を怒らせた。

「何をいつているのあなた、私はあなたの妻ですよ、あなたの会社に面会に来たお客じゃないのよ、それに、私は浩太郎と江利加の母なのよ……」

「会いたくない、誰にも会いたくない」

貝谷は尚子の言葉を無視していった。胃が痛み始めた。貝谷は顔をしかめて腹を押えた。

「胃薬だ、胃が痛い、早く持ってきてくれ」

貝谷の顔を見て、尚子は仕方なさそうに立ち上った。薬と水を置くと、リビングルームを出て行った。

貝谷は、もう一度、週刊誌の記事を読んだ。

もうテレビを見る気もしない。胃痛になると息が臭いと書いてあるので、掌を口の前で拡げて、勢い良く息を吐き出した。

煙草の匂いに交って、別な匂いがするような気がした。貝谷は自分の顔から血の気がなくなっていくような気がした。

その夜、貝谷は午前三時頃まで眠れなかった。

翌日、貝谷は社の診療所を訪れた。医者に症状を説明した。医者は、四十歳以上になったら、一年に一度は定期的に胃を検査した方が良いでしょう、といいながら、その日は外診だけした。明後日に、レントゲンで診察するという。だから、明日の夜食と、明後日の朝食は摂らないように、といった。

二日後、貝谷は白いバリウムを飲んで、レントゲン検査

をした。

結果は夕方までに知らせるから、というので、貝谷は会社から出なかった。

部下達にも、癌の気があるかもしれない、と話したりした。部下といっても、次長、課長だが、彼等は心配するような顔をしながらも、大丈夫ですよ、顔の色艶も良いし、健康そのものですよ、となくさめてくれる。

貝谷は、部下達が口先だけで、なくさめているような気がして、

「人ごとじゃないよ、君達だって年だ、自覚症状がある」と、手術しても手遅れなんだ、今のうちに、レントゲン検査を受けておいた方が良くぞ、田村君も少し顔色が悪いぞ、胃の痛みは全然ないかね」

と貝谷は痩せている田村次長に、意地悪な口調でいうのだった。いわれた田村は明らかに、不安そうな表情を浮べた。

それを見て貝谷は内心、ひょっとすると、こいつの方が俺よりも悪いかもしれない、と思ったりするのだ。

午後四時に診療所から電話が掛って来た。

貝谷の胸の鼓動が早くなった。

「貝谷さん、御心配はいりません、全く異常がありません、胃の痛みや、食欲不振はストレスかもしれませんな」

医者の方は元気が良かった。貝谷は全身から緊張感が取れて行くのが分かった。急に疲れが出て来た。だが、全く異常がない、といわれたのが、不安である。

誤診ではないか、という気もする。

「しかし先生、精神的なことで、胃が痛んだり、食欲がなくなったりするんですか？」

「そりやします、これは現代病でしてね、何かショックがあると、食欲がなくなるのは、貝谷さんにも御経験があるでしょう」

「それは分りますよ、しかし、今や私には、精神的なショックなんか、全然ありません、心配事もないんです」

「診療所にいらっしゃいますか、レントゲンをお見せしますか」

医者は、言葉だけでは納得していない、貝谷の心中を察したようであった。

「ええ、参ります」

貝谷が送受器を置くと、田村が、

「部長、何でもなかったんでしよう」

「うん、そうらしいな、まあ、しかし、レントゲンを見なくっちゃ」

そういつて貝谷は診療所に行った。

診療所には、医者と看護婦だけがいた。医者は貝谷に、数枚のレントゲン写真を見せた。

「この十二指腸のところに、一寸ぎざぎざになった場所があるでしょう、これは十二指腸潰瘍のあとです、全然心配はいりません、後は完全に健康です、貝谷さん位のお年になると慢性胃炎の方が多いんですよ、でも、貝谷さんには、その気もないようですな、御健康そのものですよ」

貝谷は眼を光らせてレントゲンを眺めていたが、漸く納得した。

昨夜、癌だと思い込んだ自分の気持ちが不思議に思えて来た。

急に世界が明るくなったような感じだった。貝谷が戻ると、次長の田村、第一課長の横沢、第二課長の井川などが、貝谷の帰りを待っていた。もう退社時刻だった。

「部長、何ともなかったんでしょう？」

と横沢がいった。横沢はまだ三十九歳であった。小太りで、童顔で、三十四、五に見える。だがなかなかの遣り手で、将来を期待されている一人だった。

「心配を掛けて済まなかった、君達、今夜身体が空いていないかい、何なら飲みに行こう」

次長の田村は先約があった。

下請の西城電機の社長に招待されている。貝谷にも声が掛ったのだが、貝谷はレントゲンの検査日でもあり、断っておいたのだ。

「部長、それなら、西城電機の方に行きませんか、西城さんとしても、部長が来られた方が、張り合がありますよ」

西城電機はテレビの部品を製造している。従業員も二百人以上いて、下請といっても、相当儲かっている。普通、西城が招待するのは購入部の連中だが、西城はその点、販売部の方にも気を使っていた。

「しかし、今から人数が増えるとなると、西城君も、都合が悪いんじゃないかな」

「大丈夫ですよ、横沢君と井川君も連れて行きましょう、私が料亭に電話を入れておきます」

西城はキタ新地の中の料亭に田村を招待していたらし

い。貝谷は案外、そういうことに気を使う方だが、その点、瘦せている田村の方が図太かった。田村は貝谷よりも、入社が一年後だった。しかし、部長になれるのは、五十の声を聞いてからだろう。

「じゃ、そうしようか」

と貝谷がいうと、

「そうですね、何といっても儲けてるんですから」と田村は、その儲けも杉谷電機のおかげではないか、といった口吻だった。

田村は料亭に電話を掛け、西城電機の席の人数が三人増える、と告げた。

「部長も出席される、西城さんにお伝えしておいて下さい」

貝谷達は五時半に社を出た。杉谷電機はK電鉄の沿線にあった。阿倍野まで三十分である。広い敷地には、本社、工場、本社研究所などが、適当な間隔を保って建っている。

阿倍野からタクシーに乗った。

高速道路が出来て以来、キタの新地までは直ぐだった。料亭に着いたのは、六時十五分である。六時という約束だから、招待を受ける側としては、丁度良い時間だろう。

女中に案内されて部屋に入ると、西城と専務が下手に坐っていた。

西城は丸顔で血色が良い。五十半ばで、額が、かなり禿げ上っている。

「この度は、御目出度う御座居ます」

挨拶が済んだ後、西城がそういつて貝谷に頭を下げた。そういわれた途端、貝谷は、胸の中に隙間風が吹き込んで来たような気がした。

何が原因なのか、さっぱり分らない。

見慣れた愛想笑いを浮べている西城の顔が、遠くに去り、小さく見えたのだった。

酒肴が運ばれ、女中が貝谷の盃に注いだ。

「貝谷部長の御栄転を祝して」

西城が盃を持ち上げた。

野暮な男だ、田舎者に違いない、と貝谷の胸の中で呟く声がする。

そうか、西城が今夜招待したのは、俺の栄転を祝うためだったのか、と貝谷はやっと気付いた。

貝谷が断ったなら、何故、別な日に、といわなかったのだろう。いや、そういえば、何時でも都合の良い日をお知らせ下さい、と確か西城はいつていたようだ。

貝谷はそれを忘れていたのである。

そういえば、部長になって以来、あちこちから、かなり招待の声が掛っていた。

この時、貝谷は、はっとした。

今夜、別な誰かに招待されていたような気がしたのである。

何故こんなにも忘れが酷くなったのか。

貝谷は慌てて手帳を出した。招待に応じていたなら、手帳につけている筈だった。

「どうしたんですか？」

と田村がいった。

「いや、どうも大変なことをしてしまった」

そういいながら、貝谷は手帳を開いた。

部下達も、西城側も奇妙な顔で、貝谷を眺めていた。

電車の中で

同席者の視線を浴びながら貝谷は手帳を開いた。三月、四月と開いて突然貝谷は、今日が何日であったか忘れてしまった。身体中に汗が滲み出て来た。そうだ、確か今日は取締役営業部長の矢田野や他の部長連中と宴を持つ予定だった。貝谷は第一販売部長に栄転したが、第二、第三販売部長はそのままである。だから他の部長連中と顔つなぎの宴を持つと、矢田野がいったのだった。

その日が、今日だったような気がする。

「えーと、何日だったかな、今日は？」

と貝谷は呟いた。

「部長、十八日ですよ」

と田村が直ぐ答えた。

貝谷は十八日のところを見た。

今日のレントゲンの結果が書かれている。診療所から戻り貝谷は直ぐ、異常なし、ただし、十二指腸潰瘍のあとあり、と几帳面な字で書いているのだった。だが、夜の宴会の予定はなかった。貝谷ははっとした。

何日だったか、と先を見ると二十三日になっている。五日も先だった。これは診療の結果を書いた時、当然確認し

ている筈だった。

だから西城の招待に応じたのである。

額に汗が浮いているのは暑さのせいではない。貝谷は顔をしかめて手帳を上衣の内ポケットにしまった。

「他のお約束でも……」

と西城がいった。

経営者だけに西城は勘が鋭い。

「いや、一寸思い違いをしていたんです、この頃、年のせいか、もの忘れが酷くなりましてね、どうも」

と貝谷は言葉を濁した。それで、一座の連中も、ほっとしたようだった。

それから酒を飲み始めたが、貝谷の気持は何となく落ち着かない。胃の方も異常がないのだし、何故こんなに苛々するのか、自分でもはつきりしない。

「部長さん、年のことをいわれちゃ、私なんかどうなるんですか、私も五十五になりましたよ、だけど、私は残りの人生はこれからだと、思っています、戦争に七年も取られてましたし、捕虜生活が三年、合せて十年間ちゅう大事な年を犠牲にしたんですから、私は実際の年から十年を引いた年を、私の年だと思っとるんです、だから、仕事も、この方も……」

と西城は小指を立てて、一所懸命ですわ、と笑うのだった。仲居達が口々に、社長さんのお達者なのは評判ですわ、とお世辞とも冗談ともつかない口調でいう。

そういうえば西城は、キタの新地で良く遊び歩いているようだった。

「羨ましいですな、私なんかその方はさっぱりです、ひとつあやかりたいものですな」

と田村はもう赤くなった顔で、楽しそうにいった。二人の課長は追従笑いを浮べた。

ここ数年、貝谷は浮気などしていない。それこそ、仕事一途に生きて来た。地方に出張し、招待されて芸者が席にはべった時でも、手を出さなかった。

仕事の関係上、バーで飲む時もあるが、ホステスを口説いたことがない。反対に、ホステスから口説かれたことがある位だった。

勿論、貝谷だって結婚して以来、全く浮気しなかったとはいえない。課長時代までは、出張先で芸者と遊んだこともあった。

ただ四十を過ぎてから何となく億劫になり、会社と家庭を往復するだけの生活になってしまった。趣味といえはゴルフ位のものだった。といっても、ゴルフも付合ゴルフで、自分から熱中して、ハンディを上げようという気持はなかった。

「田村さん、何をおっしゃる、田村さんのような身体つきの方は、お強いですよ、大抵の女は、太っている男より瘦せている方が強い、といいますがね、矢張りこれは真実ですよ、女共が、自分で体験した結果、生れた言葉です」

こういう席では、女の話が一番とばかり、西城はしきりにそういう話をするのだった。貝谷は、酒も余り強くない。

仲居の一人が西城に質問した。

「社長さんは、月に何度位、実行なさってはりますの？」

「そうやな、何度位になるかな、六回とすると五日に一回というわけやな、六、七回というところかな」

「五十五で、そりゃお強いわ、社長さん」

と仲居は感心しようだった。

「阿呆、わしは四十五と思とるんやぞ」

「四十五でも、お強いですわ」

と別の仲居もいった。

お世辞ではなく、心からそういつているようだった。貝谷は酔った眼でぼんやり西城を眺めた。女の話になると、貝谷はその会話に乗れない。黙って聞き役になってしまふ。

西城の禿げ上った額が光っていた。脂切っている顔というのは、こういう顔だろう。

それにしても、自分より七歳も年上の男が月に六、七度も女性と関係出来るなんて、今の貝谷には想像もつかない。貝谷は尚子と、月に一度の夫婦関係を持つのがやっとだった。

尚子は、身体が太り始めてから、その方の欲望が減退したらしいので、貝谷も、ほっとしている。

「どうも、こんな話ばかりしまして」

西城は、貝谷に禿げた額を搔いた。

「いや、なかなか面白いですよ」

と貝谷は言った。

西城は購入部の連中とは絶えず飲んでゐる。彼等から、

貝谷は固い男だ、と聞いて知っていた。

料亭を出てから、西城が行きつけの、クラブエステイに行った。ホステスが二十数人という、キタ新地では中どころのバーだった。

西城は良い顔だと見えてマダムが早速やって来た。西城が貝谷を紹介すると、マダムは改まった顔で、早速名刺を持って来させ、貝谷に渡した。田村や他の課長連中は、西城と来たことがあるらしい。

田津田雪枝という名前だった。

「色っぽい名前だね」

と貝谷は言った。

「あら、古臭い名前だとは良くいわれますが、色っぽいなんていわれたの、初めてですわ」

「そうかね、しかし、ママさんにぴったりだよ、雪のように肌が白い」

「光栄で御座居ます」

雪枝は深々と頭を下げた。

雪枝は三十前後である。華奢だが着痩せするタイプかもしれない。

若いホステス達が集って来た。田村はかなり遊び慣れているようである。早速、ホステスと踊ったりしている。

課長連中も、アルコールの勢いで、傍のホステスとたわむれている。貝谷は、どうも、そういう雰囲気は溶けこめないのだった。

雪枝は貝谷の気持を察したのか、

「あら、お婆ちゃんが何時までもお傍にいては駄目ですわ

ね、誰か若い女を呼びましょう」

「いや、ママさんで良いんだ、本当だよ」
と貝谷は慌てていった。

雪枝が立とうとしたので、貝谷は雪枝の手首を握った。これが餅肌というのだろう。この頃い若の女性に、こういう肌を持った女は少なくなった。昔の日本の女の肌である。名前と同じような肌だった。

「あらっ」

といって雪枝は坐った。

貝谷も、自分で吃驚して手を離した。照れたようにブランドイを飲んだ。雪枝は艶っぽい眼で貝谷を見詰めた。

「ママさんの、その名前は肌に合せてつくったんだね」

と貝谷は呟いた。それが、雪枝には思ひ掛けない言葉だったらしい。

「意地悪ね、でも流石は部長さんですわ」

そういつて、雪枝は貝谷の太腿を突いた。どうやら、貝谷の呟きは、当たっていたようであった。雪枝は、身体を貝谷に寄せると、

「あーあ、飲みたい気分になったわ、私もいただこうかしら、社長さん飲みますわよ」

「ほう、珍しいな、一体どういふことなんだい、まだ時間が早いのに、惱ましい吐息をついたりして、貝谷さんに、一眼惚れ、というところかな」

西城は愉快そうに笑った。貝谷の耳には、西城の笑い、自分一人楽しんでいるような笑い声に聞えた。野暮な部長さんには、一寸手に負えん女でっせ、と西城は腹の底

で嘲笑しているような気がするのだった。

それから更に三軒ほど飲み、貝谷は酔って家に戻った。酔っているのに直ぐ眠れない。そういえば、この頃は寝つきが凄く悪くなった。昔は蒲団に入れば直ぐ眠る方だったが、最近は一時間は掛る。酔いのせいで心臓の鼓動が早い。頭がアルコールでぼんやりしている。

そのくせ頭の一点が醒めているのだ。その醒めている場所に今夜会った色々な人物の顔が浮ぶ。笑っている西城、時々貝谷を意識しながら飲んでいる田村、雪枝や他の女達の顔、それ等の顔が重なり合って、なかなか眠れないのだった。

酔っているにも拘らず寝つくまで二時間位、掛ったのではないか。

貝谷も昔からの癖で、朝食をとりながら新聞を読む。出勤前のあわただしい時間である。子供達は、貝谷よりも早めに食事を済まし、家を出ていた。

貝谷は先ず経済新聞を読む。これは仕事の一つだった。

それから一般の日刊紙を抜けた。この場合は社会面が先だ。貝谷の視線は或る記事に釘付になった。

それは大会社の次長が首を吊った記事だった。次長になったばかりで、家庭面でも、仕事の上でも、私生活にも問題はない。

見出しには、ノイローゼの結果か、とあった。細君の談話も掲載されている。

全く原因が分らない、というのだ。死んだ男の上司は、

非常に真面目な人物で、仕事熱心だった。何故首を吊ったかさっぱり分らない、といっている。

ノイローゼか、と貝谷は呟いた。

ストレスが積みかさなると、内向的な性格の人間はノイローゼに掛るということを、貝谷は知っていた。

貝谷は最近、自分もノイローゼに掛っているのではないかと不安に思っていた。

こういう記事を読むと、とくにショックが大きい。

貝谷は尚子に、その新聞記事を見せた。尚子は怪訝そうな表情で読んだが、黙って新聞を自分の傍に置いてしまった。

「ノイローゼで自殺するなんてこと、考えられないわ、何か原因があるに決っています、この記事にはのっていないけど、女性関係か何か、あったに違いないわ、次長になったばかりだというのに、本当に馬鹿な人、奥さんがお気の毒だわ」

尚子は自殺した人間に何の同情も示していない。貝谷は不思議そうに尚子を見た。

尚子は、自分が自殺したらどう思うだろうか、と想像した。泣くだろうか。

死を知った瞬間は泣くかもしれない。だがその後、尚子は怒るのではないか。

自分や子供達のことを忘れて、自殺するなんて、勝手な男だ、これから一体どうしてくれる積りなの、と尚子はそののりではないか、そんな気がするのだった。

すると大きな尚子の身体が遠ざかり次第に小さくなって

行く。彼方で坐っているように見える。貝谷は自分の眼をこすった。

尚子が見知らぬ他人のように思える。

小さな人形のようになった尚子を見詰めながら貝谷は、俺は一体、誰のために働いているのだろうか、と思った。

その途端に尚子の身体が大きくなった。今度は異常に大きく見える。

まるで貝谷に、のし掛って来るようだった。

「何を変な服で、私を見ているの、一体どうしたというの」

「いや、何でもない、何でもない」

貝谷は慌てて弁解した。

「何でもないことないわ、まるで他人を見るような眼付じゃないの、あなたも、ノイローゼだというの、馬鹿らしい」

尚子は、早くしないと会社に遅れますわよ、といいながら食卓を片付け始めた。

早くしないと会社に遅れますわよ、結婚して以来貝谷は、耳にたこが出来るほど、この言葉を尚子から聞かされて来た。

会社に遅れるということは、仕事の面でルーズになるということだ。そして、それは、貝谷の出世にも影響する。

尚子が一番気にしているのは、貝谷の出世ではないか。

それは、尚子自身のためでもあった。この女は、俺のためよりも、自分自身のためを思って、それをいい続けて来たのだな、と貝谷は思うのだった。